

< 評伝・内橋克人 ～共生と平和のジャーナリスト >

(1) 筆一本の旅路「人間主語」貫き、市場主義

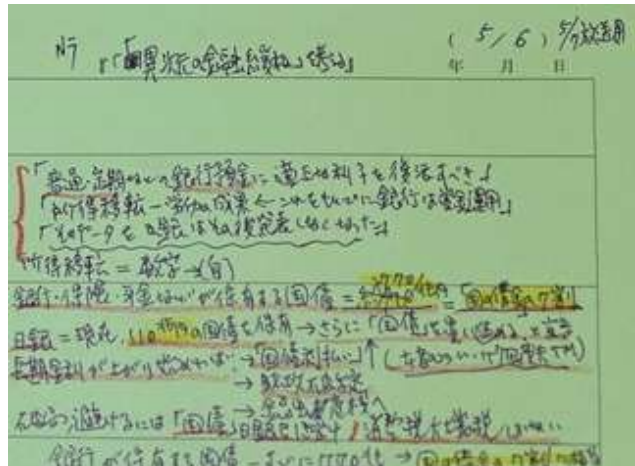
<https://infokkna2.com/ironroad2/2025htm/2025mutsu/R0710Uchihashi.pdf>



評論家・ジャーナリスト内橋克人さん。

現場取材を徹底し、共生経済の可能性を

追求した＝2003年、東京都千代田区



取材、講演、テレビ・ラジオへの出演の一つ一つに丁寧に対応した。詳細なメモを作成して臨んだ(撮影・三津山朋彦)



B29による未明の大空襲で、建物が焼け落ち煙がくすぶる中を

行き交う市民ら＝1945(昭和20)年3月17日、省線元町駅から西を望む



自宅近くの古刹・勝福寺の境内から市街地を望む。

神戸空襲、阪神・淡路大震災の際もここから市街地の状況を見た

＝神戸市須磨区大手町9(撮影・三津山朋彦)

内橋克人 年譜	
1932年7月2日	神戸市須磨区で生まれる。父仲次、母カメ
45年3月17日	神戸空襲を体験。12歳
57年3月	神戸商科大(現兵庫県立大)卒業 神戸新聞入社。経済部に配属
64年3月	退社。フリージャーナリストに
78年1月	夕刊フジで「匠の時代」の連載開始。脚光を浴びる
78年	「ドキュメント 恐慌 サラリーマン恐怖時代」。昭和恐慌から現代を問う
82年	「幻想の『技術一流国』ニッポン」。基礎研究を怠り始めた日本に警鐘
84年	「日本エネルギー戦争の現場」。東京電力福島第1原発を取材。原発への警鐘をいち早く鳴らす
89年	「退き際の研究」。世襲社会の弊害を指摘
93年	NHK「クローズアップ現代」に出演。2014年10月30日まで計約50回出演
94年	「日本会社原論」(全6巻、共編) 「破綻か再生か 日本経済への緊急提言」
95年	「共生の大地」。多元的な経済社会を展望 「大震災 復興への警鐘」(鎌田慧共著)。阪神・淡路大震災の被災地から考える 「規制緩和という悪夢」(共著)。規制緩和礼賛論を批判
97年	「経済学は誰のためにあるのか 市場原理至上主義批判」。9人の経済学者と対談
98～99年	「内橋克人 同時代への発言」(全8巻)
2000年	「不安社会を生きる」 「浪費なき成長 新しい経済の起点」
02年	「人間復興」の経済を目指して(城山三郎共著)
03年	「＜節度の経済学＞の時代 市場競争至上主義を超えて」 「もうひとつの日本は可能だ」
06年	「悪夢のサイクル ネオリベリズム循環」 イーハートブ賞
08年	NHK 放送文化賞
09年	「始まっている未来 新しい経済学は可能か」(宇沢弘文共著) 「共生経済が始まる 世界恐慌を生き抜く道」
11年	「大震災のなかで 私たちは何をすべきか」(編)。東日本大震災と原発事故を問う
13年	「荒野遊記」第1、2部。自伝的小説
21年9月1日	急性心筋梗塞で神戸市須磨区須磨の病院で死去。89歳



内橋克人 年譜

1932年7月2日	神戸市須磨区で生まれる。父仲次、母カメ
45年3月17日	神戸空襲を体験。12歳
57年3月	神戸商科大(現兵庫県立大)卒業 神戸新聞入社。経済部に配属
64年3月	退社。フリージャーナリストに
78年1月	夕刊フジで「匠の時代」の連載開始。脚光を浴びる
78年	「ドキュメント 恐慌 サラリーマン恐怖時代」。昭和恐慌から現代を問う
82年	「幻想の『技術一流国』ニッポン」。基礎研究を始めた日本に警鐘
84年	「日本エネルギー戦争の現場」。東京電力福島第1原発を取材。原発への警鐘をいち早く鳴らす
89年	「退き際の研究」。世襲社会の弊害を指摘
93年	NHK「クローズアップ現代」に出演。2014年10月30日まで計約50回出演
94年	「日本会社原論」(全6巻、共編) 「破綻か再生か 日本経済への緊急提言」
95年	「共生の大地」。多元的な経済社会を展望 「大震災 復興への警鐘」(鎌田慧共著)。阪神・淡路大震災の被災地から考える 「規制緩和という悪夢」(共著)。規制緩和礼賛論を批判
97年	「経済学は誰のためにあるのか 市場原理至上主義批判」。9人の経済学者と対談
98～99年	「内橋克人 同時代への発言」(全8巻)
2000年	「不安社会を生きる」 「浪費なき成長 新しい経済の起点」
02年	「人間復興」の経済を目指して(城山三郎共著)
03年	「<節度の経済学>の時代 市場競争至上主義を超えて」 「もうひとつの日本は可能だ」
06年	「悪夢のサイクル ネオリベリズム循環」 イーハートブ賞
08年	NHK放送文化賞
09年	「始まっている未来 新しい経済学は可能か」(宇沢弘文共著) 「共生経済が始まる 世界恐慌を生き抜く道」
11年	「大震災のなかで―私たちは何をすべきか」(編)。東日本大震災と原発事故を問う
13年	「荒野遊記」第1、2部。自伝的小説
21年9月1日	急性心筋梗塞で神奈川県鎌倉市の病院で死去。89歳

神戸の生んだジャーナリスト、内橋克人。

9月1日で没後4年になった。

終(つい)の棲家(すみか)となった神奈川県鎌倉市の自宅には膨大な書籍や資料が並んでいた。

目を引いたのはA4の封筒だ。取材や講演、番組出演の記録が1件ずつ整理されていた。

書籍や資料の一部は神戸市内に移されている。

封筒の表紙には依頼を受けた日時、担当者名、本番の日時、場所が記載され、中には依頼状や掲載誌・紙、使った資料、自ら書いたメモ、書き込みを入れたシナリオなどが入っている。

1990年代後半以降の封筒の数は800を超す。

精査すると激動の同時代史が浮かび上がってくる。

▽96年5月、クローズアップ現代「地方自治体の赤字財政体質」

▽同年7月、テレビコメント「高島屋・商法違反事件」

▽同年11月、ラジオ・ビジネス情報「限界見えた日本式合理化」

▽97年4月、神戸新聞社説「復元に値する街づくりを」

▽同月、視点・論点「規制緩和の本質」

▽同月、市民＝議員立法(参院議員会館)

▽98年7月、ラジオ・ビジネス展望

「自民総裁選と金融再生の行方」。

神戸新聞の経済記者から歩き始め、独立後、終生、フリーランスとして活動した。経済ジャーナリズムでは企業やマーケットなど「市場」が主語になりがちだが、市井の人々への共感と現場取材に裏打ちされた「人間主語」の視点は他に類を見ないものだった。

その眼力でバブル崩壊後の日本を覆った不況の長期化を予見。政府は規制緩和と構造改革を推進したが、「失われた30年」に陥り、影響は現代に及ぶ。

95年が分水嶺(れい)になる。そう確信したのは阪神・淡路大震災がきっかけだった。

45年の神戸空襲で母親代わりの人を亡くし、50年後の大震災で再び瓦礫(がれき)と化した故郷の姿に恐れを感じた。「平常時には深い地底にもぐったまま、滅多(めった)なことで人の目に触れることのない真の『断層』の姿に違いない。今後、悲愴(ひそう)的な無残なものがかかる」。予言のように響いた。

バブルに踊り、「世界を超えた」という自賛論に酔い、不祥事が繰り返され、未曾有の金融危機が起きた。震災で職や家をなくした人が続出したが、その後、不況のたびに解雇や派遣切りで路頭に迷う人々があふれた。「ワーキングプア」として働いても貧困から抜け出せない構造に警鐘を鳴らした。

資料が並ぶ書棚から「阪神大震災『神戸・須磨・実家』ネガとフィルム」と書かれた封筒を見つけた。95年6月4日のものだ。写真には損壊した実家の前にたたずむ当時62歳の内橋の姿がある。

今年で戦後80年、震災30年。この家から戦後社会の荒野を歩む筆一本の旅が始まった。

■神戸空襲と震災、言論の軸に 競争と共生、「裂け目」見つめ続け

強者におもねることなく、市井の人々の立場から時流に警鐘を鳴らし、共生経済の可能性を説き続けた。

経済評論家内橋克人。大切にしたいのが「生きる、働く、暮らす」という人々の営みだ。

巨大資本に翻弄(ほんろう)される自営業者、東京一極集中に追いやられる限界集落、農業自由化の波にもまれる農業者、基地が集中する沖縄の住民、震災復興に取り残される被災者…。

「権力を背にした国家に代わって、もう一つの選択肢がある」として共生経済を提唱した。

環境負荷ゼロ、脱原発、エネルギー自給、地産地消の豊かな地平を丹念な取材で指し示した。

市場主語から人間主語へ。

「もうひとつの日本」を見通す揺るぎない視座を、内橋はいつ、どのようにして獲得したのだろうか。

神戸・須磨

「空襲でも震災でも、忘れ去られ、消えてしまった人はいったいどれだけいるのだろうか。

この街に降り積もる亡き人の名と軀(からだ)と、そして魂を、いまを生きるものが蘇らせなければならない」。

戦争体験、阪神・淡路大震災の被災体験を二重写しにした自伝的作品「荒野渺茫」(2013年)でつづった一文だ。

神戸市須磨区大手町6丁目。緑の裏山が間近に迫る住宅地の一角で造船工の父、心優しい母の間に1932(昭和7)年に生まれた。母はチフスで早世し、45年の神戸空襲では庭につくった防空壕に焼夷弾が落ち、母親代わりになって世話をしてくれた女性が犠牲になった。崩れ落ちた防空壕の前で立ち尽くす12歳の少年にとって、どれほどの喪失感だっただろうか。

神戸市史によると神戸市域への空襲は45年2月から苛烈になった。それまでの軍事施設や軍需工場への精密爆撃から焼夷弾による市街地への無差別絨毯爆撃に転換した。

3月17日未明、69機のB29爆撃機が油脂エレクトロン焼夷弾3万3952発を投下し、同市の西半分を壊滅させた。

弟の伸二(88)は「空襲で家の前の道を隔てたところまで焼けた」。焼け残った生家は50年後、阪神・淡路大震災で損壊し、取り壊された。裏山の中腹に古刹 勝福寺がある。

兄弟は空襲で焼け野原になった市街地を、半世紀後の大震災の際は瓦礫と化した被災地を、境内から目に焼き付けた。「兄の言論活動の基礎になったのは神戸で体験した戦争と震災」と話す。

大震災以降、論調に明確な変化が出てくる。規制緩和に舵を切った90年代の長期不況の実態を見据えた後、市場原理一辺倒からの脱却の意義を確信に満ちて唱えるようになった。著書が続いた。「浪費なき成長」「節度の経済学」の時代「もうひとつの日本は可能だ」「共生経済が始まる」…。

私たちの社会には二つの日本がある。市場原理を至上とする競争セクター、生きる・働く・暮らすの三つが地域で重なり合う共生セクター。周縁に目を凝らし、周縁に向かう。「一つの日本ともう一つの日本を分かち断崖の裂け目ははいよいよ地殻の奥底にまで達したように私には思われる」

六つのエポック

ジャーナリスト・内橋克人を形作った軌跡をたどるとエポックは六つある。

一つ目が12歳で体験した神戸空襲。焼夷弾の下を逃げ惑い、大切な人を失った。当時見た光景を終生胸に抱いた。「戦争前、扇動に乗せられた国民は熱狂し、『鬼畜米英を撃て』と叫び、街なかを行進した」。権威、権力に弱く、自ら上に合わせていく心性。「頂点同調主義」「熱狂的等質化現象」としてその危うさを指摘した内橋は繰り返した。「私たちの社会は戦前戦後で変わっていない」

次に神戸新聞での記者経験。中小企業の取材に打ち込んだ。中内功(故人)が起こしたダイエーの草創期の熱気に触れたのもこのころだ。「神戸という地域と経済活動が重なる場の大切さ」を感じたという。青年記者は地域経済ジャーナリズムの醍醐味(だいごみ)を知った。

三つ目がものづくり日本の最先端を追った夕刊フジの連載「匠(たくみ)の時代」(78年に単行本化。後に全12巻で文庫化)だ。人と技術の接点領域を深い射程でとらえた。好評を博し、シリーズ化されたが、真の創造技術を育む日本のものづくり風土の脆弱さに危機感を抱き、「幻想の『技術一流国』ニッポン」(82年)を出す。

四つ目がバブル崩壊後の日本社会に衝撃を与えた調査報道「規制緩和という悪夢」(95年)だ。規制緩和礼賛の中、警世の書として市場原理主義のはらむ問題点を指摘した。これはその後主張した市場原理至上主義批判のバックボーンになる。

五つ目が故郷の神戸が深刻な打撃を受けた95年の阪神・淡路大震災だ。

「共生の大地」(95年)でその価値高い息吹を活写した。

(特別編集委員・加藤正文)

神戸新聞客員論説委員も務めた。2021年、89歳で死去。

1)筆一本の旅路「人間主語」貫き、市場主義

神戸新聞 2025年9月15日 朝刊
 <評伝・内橋克人 ～共生と平和のジャーナリスト>
 (1)筆一本の旅路「人間主語」貫き、市場主義



評伝 内橋克人

競争と共生、裂け目、見つめ続け

第一本の旅路

内橋克人、筆路

1925年（大正14年）9月15日、兵庫県神戸市東灘区に生まれる。父は造船業、母は教師。幼少から読書が好きで、特に小説に傾倒。戦時中は学徒出陣で中国に赴き、戦後には復員兵として生活。1948年に神戸大学文学部に入学し、文学研究に専念。戦後の混乱期に、社会の矛盾と人間の苦悩を鋭く捉え、独自の視点で報道と文学を追求するようになる。

内橋克人、筆路

1950年代前半、戦後復興期。社会は希望と不安の入り交じった状態。内橋は、戦後の日本社会を鋭く批判し、人間の尊厳と平和の重要性を叫ぶ。『人間主語』シリーズの第一巻『人間の条件』を発表。この中で、戦後の日本が直面している問題を、人間の存在意義という観点から問い詰める。市場主義の台頭に対する批判も、この時期から顕著になる。

内橋克人、筆路

1950年代後半から1960年代前半。高度経済成長期。社会は急速に変化し、物質豊かさがもたらした新たな問題も生じた。内橋は、成長の影に隠れた社会の歪みや、人間性の喪失を痛感。『人間の条件』シリーズを続行し、社会の矛盾をさらけ出す。市場主義の批判は、この時期にさらに鋭くなる。一方で、共生の理想を追求し、平和の道を探る姿勢も変わらない。

内橋克人、筆路

1960年代後半から1970年代後半。高度経済成長のピークを過ぎ、社会は新たな課題に直面。内橋は、社会の矛盾を鋭く捉え、人間の尊厳と平和の重要性を叫ぶ。『人間の条件』シリーズを続行し、社会の矛盾をさらけ出す。市場主義の批判は、この時期にさらに鋭くなる。一方で、共生の理想を追求し、平和の道を探る姿勢も変わらない。

「人間主語」貫き、市場主義批判

評伝 内橋克人

第一本の旅路

内橋克人、筆路

1925年（大正14年）9月15日、兵庫県神戸市東灘区に生まれる。父は造船業、母は教師。幼少から読書が好きで、特に小説に傾倒。戦時中は学徒出陣で中国に赴き、戦後には復員兵として生活。1948年に神戸大学文学部に入学し、文学研究に専念。戦後の混乱期に、社会の矛盾と人間の苦悩を鋭く捉え、独自の視点で報道と文学を追求するようになる。

内橋克人、筆路

1950年代前半、戦後復興期。社会は希望と不安の入り交じった状態。内橋は、戦後の日本社会を鋭く批判し、人間の尊厳と平和の重要性を叫ぶ。『人間主語』シリーズの第一巻『人間の条件』を発表。この中で、戦後の日本が直面している問題を、人間の存在意義という観点から問い詰める。市場主義の台頭に対する批判も、この時期から顕著になる。

内橋克人、筆路

1950年代後半から1960年代前半。高度経済成長期。社会は急速に変化し、物質豊かさがもたらした新たな問題も生じた。内橋は、成長の影に隠れた社会の歪みや、人間性の喪失を痛感。『人間の条件』シリーズを続行し、社会の矛盾をさらけ出す。市場主義の批判は、この時期にさらに鋭くなる。一方で、共生の理想を追求し、平和の道を探る姿勢も変わらない。

内橋克人、筆路

1960年代後半から1970年代後半。高度経済成長のピークを過ぎ、社会は新たな課題に直面。内橋は、社会の矛盾を鋭く捉え、人間の尊厳と平和の重要性を叫ぶ。『人間の条件』シリーズを続行し、社会の矛盾をさらけ出す。市場主義の批判は、この時期にさらに鋭くなる。一方で、共生の理想を追求し、平和の道を探る姿勢も変わらない。

内橋克人、筆路

1960年代後半から1970年代後半。高度経済成長のピークを過ぎ、社会は新たな課題に直面。内橋は、社会の矛盾を鋭く捉え、人間の尊厳と平和の重要性を叫ぶ。『人間の条件』シリーズを続行し、社会の矛盾をさらけ出す。市場主義の批判は、この時期にさらに鋭くなる。一方で、共生の理想を追求し、平和の道を探る姿勢も変わらない。

内橋克人、筆路

1960年代後半から1970年代後半。高度経済成長のピークを過ぎ、社会は新たな課題に直面。内橋は、社会の矛盾を鋭く捉え、人間の尊厳と平和の重要性を叫ぶ。『人間の条件』シリーズを続行し、社会の矛盾をさらけ出す。市場主義の批判は、この時期にさらに鋭くなる。一方で、共生の理想を追求し、平和の道を探る姿勢も変わらない。